



史記卷之
儀

15
1456
2



門 45
號 1456
卷 2

八子歌六冊

三上藏書

早稲田大學圖書館
昭和31.9.27
藏書

月夕隨筆一巻目錄

- 一 作日 古くは 〇〇〇〇
- 一 竹尾 早人 大蛇 〇〇〇〇
- 一 酒 〇〇〇〇
- 一 如 〇〇〇〇
- 一 〇〇〇〇
- 一 〇〇〇〇
- 一 〇〇〇〇
- 一 〇〇〇〇
- 一 〇〇〇〇
- 一 〇〇〇〇



- 一 昌教源左切腹古く事ありし事 十一
- 一 久保田金七事 十二
- 一 伴右左衛門大坂陣陣死事 十三
- 一 伴左衛門右衛門陣死事 十五
- 一 日人長智事 十六
- 一 宗右衛門大坂陣死事 十八
- 一 伴左衛門右衛門陣死事 二十
- 一 瀧川九郎事 二十一
- 一 沼上公事大坂陣死事 廿四
- 一 本自権左衛門事 廿六
- 一 上杉右衛門事 廿七
- 一 伴左衛門主水一腕切腹事 三十
- 一 長谷川惣兵衛事 三十一
- 一 鐵村通忠事 三十二
- 一 赤松孫兵衛大坂陣死事 三十六
- 一 神谷助左衛門大坂陣死事 三十七
- 一 井筒右衛門浪人金世治事 三十九
- 一 久保左衛門事 四十
- 一 松下右衛門事 四十三

昌教源左切腹古く事ありし事 十一
 久保田金七事 十二
 伴右左衛門大坂陣陣死事 十三
 伴左衛門右衛門陣死事 十五
 日人長智事 十六
 宗右衛門大坂陣死事 十八
 伴左衛門右衛門陣死事 二十
 瀧川九郎事 二十一
 沼上公事大坂陣死事 廿四
 本自権左衛門事 廿六
 上杉右衛門事 廿七
 伴左衛門主水一腕切腹事 三十
 長谷川惣兵衛事 三十一
 鐵村通忠事 三十二
 赤松孫兵衛大坂陣死事 三十六
 神谷助左衛門大坂陣死事 三十七
 井筒右衛門浪人金世治事 三十九
 久保左衛門事 四十
 松下右衛門事 四十三

昌教源左切腹古く事ありし事 十一
 久保田金七事 十二
 伴右左衛門大坂陣陣死事 十三
 伴左衛門右衛門陣死事 十五
 日人長智事 十六
 宗右衛門大坂陣死事 十八
 伴左衛門右衛門陣死事 二十
 瀧川九郎事 二十一
 沼上公事大坂陣死事 廿四
 本自権左衛門事 廿六
 上杉右衛門事 廿七
 伴左衛門主水一腕切腹事 三十
 長谷川惣兵衛事 三十一
 鐵村通忠事 三十二
 赤松孫兵衛大坂陣死事 三十六
 神谷助左衛門大坂陣死事 三十七
 井筒右衛門浪人金世治事 三十九
 久保左衛門事 四十
 松下右衛門事 四十三

あゝ口を石にひたし
い葉用たるもの花抱ひ
も成りし志もや
つ子谷なぬ
人まらむ
このをかり
し
一
市一力を分た
時らるる
事や
一

廻り大勢に
なにおの
近くあ
急たる
し
小舟
を
ち
是ら
勢
乃

今も定まらぬをうらむをあらうくしむ物一本二
本と書しうらぶる目撃しむ物一冊ありしを
分借しむる物と云ふは流しむる物と云ふを
見の河をてつたの事なり感一させ
りしむるもめんしむる物きりしむる物
なり

一久保田合とて大板印書小首書りのまゝと云
名をしし然る小上別新田原のち姓室傳
の如き以て越後へ来たる久保田合と云ふは
いふ成人を同しむる物と云ふは
久保田合と云ふ物と云ふ物一冊ありしむる物

一久保田合とて大板印書小首書りのまゝと云
名をしし然る小上別新田原のち姓室傳
の如き以て越後へ来たる久保田合と云ふは
いふ成人を同しむる物と云ふは
久保田合と云ふ物と云ふ物一冊ありしむる物
一久保田合とて大板印書小首書りのまゝと云
名をしし然る小上別新田原のち姓室傳
の如き以て越後へ来たる久保田合と云ふは
いふ成人を同しむる物と云ふは
久保田合と云ふ物と云ふ物一冊ありしむる物

以後に所蔵品同小くおむる數にあられたお水は
らりしとておむる中より一切の品を後へへ
りしとておむる中より又ちかき支子
海老の事見しと後ちかき支子なる中
ちまらるる支子なる中より又ちかき支子の
一ふり成りの事見しとておむる中
既り一カふり成りの事見しとておむる中
らりしとておむる中より又ちかき支子の
る支子なる中より又ちかき支子の
よりしとておむる中より又ちかき支子の
の御下隠しにておむる中より又ちかき支子の

はあはれと申すにあたりし事少く討てた敷
らりしとておむる中より又ちかき支子の
此品を珍重した件あると申すは後海老なる
一仔家なる支子なる中より又ちかき支子の
既りしとておむる中より又ちかき支子の
亦持しとておむる中より又ちかき支子の
とらちかき支子の事見しとておむる中
は海老なる支子の事見しとておむる中
大坂の海老なる支子の事見しとておむる中
らりしとておむる中より又ちかき支子の
海老なる支子の事見しとておむる中

あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり

あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり
あつたふくしきふね者らへて言ふ事ありけり

あつきの成るにわたるいづれも小乳好愛のよき満
ちぬけあつたやまをうたふたのちをいづらぬたり
まじりのものいふせよ(廿五) けさうらぬ
肉をこつたおもひにきりくまきあつた者
のよけりあつたいふたなる(廿六) 蓮をほくらうて死
者も抱(廿七) ありて因縁の善の上(廿八) 抱きぬ小
なげりもしたる(廿九) 絆縁のけり(三十) 抱れ
る眼めて終りけり(三十一) けり(三十二) 抱く
る(三十三) けり(三十四) けり(三十五) 抱く
はく(三十六) けり(三十七) けり(三十八) 抱く
えり(三十九) けり(四十) けり(四十一) 抱く

あつきの成るにわたるいづれも小乳好愛のよき満
ちぬけあつたやまをうたふたのちをいづらぬたり
まじりのものいふせよ(廿五) けさうらぬ
肉をこつたおもひにきりくまきあつた者
のよけりあつたいふたなる(廿六) 蓮をほくらうて死
者も抱(廿七) ありて因縁の善の上(廿八) 抱きぬ小
なげりもしたる(廿九) 絆縁のけり(三十) 抱れ
る眼めて終りけり(三十一) けり(三十二) 抱く
る(三十三) けり(三十四) けり(三十五) 抱く
はく(三十六) けり(三十七) けり(三十八) 抱く
えり(三十九) けり(四十) けり(四十一) 抱く

ていしきせひ法のみとて今もあけらるる
にしは山城の事をも分る事ありて
よまひしは山城の事をも分る事ありて
いしきせひ法のみとて今もあけらるる
にしは山城の事をも分る事ありて
よまひしは山城の事をも分る事ありて
いしきせひ法のみとて今もあけらるる
にしは山城の事をも分る事ありて
よまひしは山城の事をも分る事ありて

は家也物として物言実たる事と云ふ
神名所徳利をゆら連る田方めらぬ事あり
あふいしは山城の事をも分る事ありて
よまひしは山城の事をも分る事ありて
いしきせひ法のみとて今もあけらるる
にしは山城の事をも分る事ありて
よまひしは山城の事をも分る事ありて
いしきせひ法のみとて今もあけらるる
にしは山城の事をも分る事ありて
よまひしは山城の事をも分る事ありて

年姫路へ行つた等の積り格と申す事あり
 田子のぬ格降也也ある事あり
 廿一并り又と大坂行海の言はる事あり
 云々行つた事あり
 又師及中法とて彼處より力を勸めたり
 十萬と云ふ事あり
 一錢村さつる宗編思古行宮園信助死後
 何角思合行か事あり
 一錢村傳り事あり
 且坂言守事あり
 法台をいふ事あり

古傳に云ふ事あり
 一の事あり
 云々事あり
 降らし事あり
 城をいふ事あり
 一錢村さつる事あり
 一錢村傳り事あり
 且坂言守事あり
 法台をいふ事あり

此の事は文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐

此の事は文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐
ありて文々屋の事なりと宥園陸の介懐

ぬしは恨のん積弊（一）死後（一）わたりを思風
ふとちをせらるるものありしは是たのたの切
多の以ふてはた思ふらしはちのたのたを
政部をけ代ふた思ふらしはちのたのたを
元部を以てた思ふらしはちのたのたを
下台下台思ふらしはちのたのたを
を柳（一）神とありんしはちのたのたを
思ふらしはちのたのたを
ちのたのたを
一也思ふらしはちのたのたを
思ふらしはちのたのたを

院の院を以て思ふらしはちのたのたを
席に彼言のたのたを
家の思ふらしはちのたのたを
と方より思ふらしはちのたのたを
思ふらしはちのたのたを
中思ふらしはちのたのたを
事思ふらしはちのたのたを
しはちのたのたを
た思ふらしはちのたのたを
しはちのたのたを

此の事、小の順ふと河次は統を計ひん人
てんふとて進りて鎮守なり下ゆき
のらて信長善光寺東塔ありて田中城
下よりて進みんて進たたる遠を候
て一よりては入あられりて其代田
池のほらあてに在筋のわかく是くも
何れも進つて一は其進をいひて
對候らるる人ありて御免を身ら
候しはらるるはゆりてはちあは
ゆもあふ程の程たりありて是
ちの御らよとありては内記に

いこの事、小の順ふと河次は統を計ひん人
てんふとて進りて鎮守なり下ゆき
のらて信長善光寺東塔ありて田中城
下よりて進みんて進たたる遠を候
て一よりては入あられりて其代田
池のほらあてに在筋のわかく是くも
何れも進つて一は其進をいひて
對候らるる人ありて御免を身ら
候しはらるるはゆりてはちあは
ゆもあふ程の程たりありて是
ちの御らよとありては内記に

富をいひあはせし御多たをいひては
あまをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては

一
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては
御多たをいひあはせし御多たをいひては

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page, with some lines appearing slightly faded or less distinct than others. The overall appearance is that of an old, possibly handwritten record or letter.

